

2021 年2月7日

もっと偉大なことをあなたは見る

ヨハネ1：43～51

・改めて教会の姿を受け止める

今日の聖書箇所には、イエス様の弟子として歩むことになるフィリポとナタナエルの姿が示されています。先週共に読んだ箇所では、三人がイエス様の弟子として召される姿が示されていました。今日の箇所と合わせて、五人がイエス様の弟子として歩むことになりました。

イエス様の弟子たちについて、ある人が最初の教会であると言いました。勿論、教会の歴史は、聖霊が降った、あのペンテコステの出来事から始まっています。けれども、既にその原型はあったのです。それが、イエス様の弟子たちです。イエス様によって招かれて、共にイエス様に従うことになった人々、それは、教会に生きる私たちの姿であると思います。群れとして歩んでいるということです。

12月27日より先週まで礼拝を2部制として行ってきましたが、今週より通常の体制に戻るようになりました。新型コロナウィルス感染防止のためとはいえ、私たちが2部に分かれて礼拝を献げました。私自身、このことを通して、改めて教会は群れとして存在している、つまり、共に礼拝を献げることの大切さを思わされました。全ての者が共に集まって、神様を礼拝する。それこそが、私たちの教会の姿であると思います。そして、その恵みが一体何から始まっているのか、そのことについても、考えさせられたように思います。そして、この礼拝を捧げることを通して、どのような恵みが与えられているのか、改めて考えさせられたのです。

今日は、示されています二人がイエス様の弟子として歩み始めていくことになる経過を共に辿って行きます。このことを通して、このように共に礼拝を献げている私たちの歩みが一体どこから始まっているのか、そこにある神様の招きとはどのようなものであるか、神様は私たちに何を与えようとされているのか、もう一度受け止めさせていただくという思いで、今日の聖書の箇所に共に聞いていきたいと思います。

・弟子となったフィリポ

今日の箇所は、「その翌日」と言う言葉から始まっています。このことは、先週もお話ししましたが、1章19節以下の出来事を一つの出来事として、福音書を記したヨハネはは私たちに示しています。ちょうど日めくりカレンダーをめくるように、「その翌日」、「その翌日」と言葉を重ねているのです。

この日、イエス様はフィリポと出会う「わたしに従いなさい」、つまり、私の弟子として歩めと招かれたのです。すると、フィリポはそれに応えて、イエス様の弟子として歩むことになったのです。まあ、読んでいまして、すいぶん素直に従ったなあと思うのですが、やはりそれにはちゃんと道備えがあったことを思います。フィリポは、先に招かれたアンデレとペトロと同郷であったということです。その意味で、フィリポはアンデレとペトロとある繋がりがあったと思います。そして、ヨハネ先生の弟子として歩んでいたアンデレとペトロが、あのイエス様の弟子となったことを、驚きを持って受け止めていたに違いありません。そのイエス様とここで出会ってしまったのです。そこから、全てが始まりました。

前回のアンデレとペトロの時にも触れましたが、福音書を記したヨハネは、召されていくことになる側の心情にはほとんど触れていません。敢えて言えば、全く関心がなかったのです。そういうことを改めて思わされます。つまり、ここで大切なのは、フィリポに何か良い所があったとか、求める気持ちがちゃんとあったとか、そういうことではないのです。イエス様が、確かにフィリポを弟子として招かれたということなのです。そして、これは、その後に起こることに繋がっていくことになるのです。そのために、フィリポへの招きは、重要な意味を持っていたのです。

・ナタナエルへのフィリポの導き

そして、フィリポはイエス様の弟子として歩み始めて直ぐに、一人の人をイエス様の所に連れてくることになりました。それは、ナタナエルという人でした。彼はヨハネによる福音書 21 章によれば、ガリラヤ地方のカナという町の出身でした。フィリポと同じ町ではありませんでしたが、近くであるということで、繋がりがあったのかもしれません。「フィリポはナタナエルに出会って」とあります。「出会う」とありますので、道を行っている時に、たまたまナタナエルと会ったので、イエス様の所へ誘ったという様に感じられるかもしれません。この「出会う」という言葉は、ヨハネによる福音書 1 章で多く用いられている大切な言葉ですが、聖書の元の字に遡ってみますと、「見つけ出す」とか「発見する」というような意味の言葉です。私たちが心に残っている言葉では、ルカによる福音書でイエス様がなくなった一匹の羊を捜す羊飼いの姿を例えて語られましたが、羊飼いが羊を懸命に探すという時に「探す」が、ここでの「出会う」と言う言葉と同じです。ですから、ここでフィリポは、たまたまナタナエルと会って、イエス様の所へと招いたということではありません。ナタナエルにイエス様と会ってほしい、そう願って捜しあてたというような感じなのです。

ナタナエルを見つけたフィリポは、恐らく興奮してナタナエルに向かって言うのです。「わたしたちは、モーセが律法に記し、預言者たちが書いている方に出会った」と。

この「モーセが律法に記し、預言者たちが書いている方」とは、聖書、私たちが言う所の旧約聖書において神様が遣わすことを約束されていた救い主を指しています。「私たちは約束の救い主と出会った」と、興奮しながらナタナエルに伝えたのです。フィリポは、ナタナエルにもイエス様を知ってほしいと思ったからでした。

ところが、そのフィリポの願いは、ナタナエルに伝わりませんでした。ナタナエルは、イエス様の所へ行くことを拒否したのです。フィリポのある言葉に引っ掛かってしまったからでした。フィリポが「それはナザレの人で、ヨセフの子イエスだ」と言ったからでした。即座に彼は「ナザレから何か良いものが出るだろうか」と言ったことに、彼の思いがよく示されているように思います。彼らは「ナザレ」をよく知っていました。地図で見ますと、ガリラヤの中でも外れに位置しています。あんな町から救い主が現れるだろうか。更に、名もなき「ヨセフの子」とまで言われたら、とてもフィリポの言うことを受け入れられなかったと思います。それで、イエス様の所へ行くことを拒否したのです。

しかし、フィリポはあきらめませんでした。「来て、見なさい」と言うのです。つまり、実際に会ってみて、と言うのです。そうすれば、自分が言っていることが分かって、フィリポは言ったのです。それは、自分もそうだったからです。フィリポの言葉を受けて、ナタナエルは、イエス様の所へ行ったのです。恐らく親しいフィリポが懸命に誘っている、まあ、彼の顔を立てて一応行ってあげよう、そんな気持ちだったと思います。ですから、あまり期待はなかったと思います。

・ナタナエルとイエス様の出会い

フィリポに連れられて、ナタナエルがイエス様に所に来ました。すると、イエス様はこう言われたのです。「見なさい。まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」と。イエス様が大変褒められたのです。まず「この人には偽りが無い」とは、うそをつかないとか正直であるとか、そういうことではありません。イエス様が言われた意味合いは、自分の弱さをちゃんと知っている、つまり、自分を偽っていないということです。そして、「まことのイスラエル人だ」とまで言われたのです。この「イスラエル人」とは、神様に選ばれ、神様に従う民、つまり、神様の民という意味です。「この人はまことの神の民である」とイエス様は言われたのです。この言葉を聞いて、恐らくナタナエルは大変戸惑ったと思います。

少し以前になりますが、四国教区以外の教区で講演の奉仕をした時に、講演の後に紹介をしてくださいました。その講演で奉仕をするきっかけとなったのは、私を推薦された先生がいたからでした。その先生は、その後転任されていて、その時責任を負っておられた先生と私は、特に関わりがありませんでした。紹介の時に、恐らく講師

に氣を使ってくださったのだと思いますが、とても持ち上げて上げてくださったのです。その言葉を聞いた時に、ちょっと戸惑いがありました。そんな自分ではないのになあと、思わされたのです。

ナタナエルも全く関わりがなかったイエス様に「まことのイスラエル人だ。この人には偽りが無い。」とまで言われてしまったのです。恐らく心の中で「自分のことを知らないのに、どうしてこんなことを言うことが出来るのか」と思ったに違いありません。それで、こう尋ねるのです。「どうしてわたしを知っておられるのですか」と。つまり、私のことを本当は知らないのではありませんか、と尋ねているのです。少し反感を込めた質問の言葉だと思います。

ところが、イエス様から返ってきた答えは、ナタナエルにとってとても驚くような言葉だったのです。「わたしは、あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た」と。この言葉の持っている意味は、ちょっと私たちにはピンと来ないかもしれません。ユダヤの地方は、基本的に暑い地域です。その意味で、木陰は大変心の休まる場所でした。そして、当時いちじくの木は大変多く生えており、その木の下でユダヤの宗教的な指導者である「ラビ」の教えを乞うたり、聖書を学んだりする、そういう姿がありました。

イエス様がナタナエルに対して、「あなたがフィリポから話しかけられる前に、いちじくの木の下にいるのを見た。」と言っておられるのは、ナタナエルが何よりも大切にしていた聖書を読む生活をちゃんと知っておられたということです。そして、その思いの故に「まことのイスラエル人だ」と言ったということが分かったのです。自分の最も大切な部分を知っておられた。それは、ナタナエルにとって驚きだったと思います。それで、ナタナエルは「ラビ、あなたは神の子キリストです。あなたはイスラエルの王です。」と告白することになったのです。そうして、イエス様の弟子として生きることになったのです。フィリポに言われた時には、恐らくそれ程期待がなかったのに、こうしてイエス様に弟子として生きることになったのです。そして、その歩みは、ナタナエルが救い主を一所懸命探して始まったものではありません。ナタナエルが気づくよりも先に、まずイエス様がナタナエルの姿をちゃんと見ておられたのです。ナタナエルのイエス様の弟子としての歩む歩みが、そこから始まっているのです。

・「さらに偉大なこと」を

イエス様のことを受け入れていなかったナタナエルが、イエス様を受け入れて、イエス様の弟子として歩むことになった、本当に驚くべき御業が起こったのです。しかし、イエス様の言葉は、それで終わりませんでした。「いちじくの木の下にいるのを見

たと言ったので、信じるのか。もっと偉大なことをあなたは見ることになる。(50 節)」と言われたのです。自分の大切にしていた生活をちゃんと知っていて、言い当てられた。だから、救い主と信じるのか、それで終わらないとイエス様は言われるのです。

ある時に、関係のある教会の方からこんなことを聞きました。自分が人生に行き詰っていた時に、とても不思議なことがあり、教会に行くことになった。「自分は不思議なことがきっかけで教会に来たと言え、先生はそんなことではだめだと言われるでしょうね。」と。私はそんなことは思いません。誰もが、そういう経験をしていると思います。私も、信仰告白をした教会に行くことになった経過は、本当の不思議なことです。たまたまに近いものです。けれども、その教会に行ったことによって、信仰告白をし、ある伝道者との出会いを通して牧師への道を歩みことになりました。もし、その教会に行っていなかったら、自分は一体どういう歩みをしていたらと思うこともあります。そういう歩みを考えてみれば、本当に不思議なことです。けれども、それはただ不思議で終わってはならないとも思います。それが何だったのか、受け止める必要があるということです。

ナタナエルも、自分の生活を言い当てられた、それは本当に驚くべきことだったと思います。しかし、それで終わらない。「もっと偉大なことをあなたは見ることになる。／はっきり言うておく。天が開け、神の天使たちが人の子の上を昇り降りするのを、あなたは見ることになる。(50～51 節)」と、イエス様は言われるのです。不思議なことがありましたということを遥かに超える、偉大なことを見られているのです。それは、「天が開け、神の天使たちが人の子の上を昇り降りする。」、こういう姿をあなたがたは見るようになるのだと言われます。ナタナエルだけではなく、イエス様の弟子となった者は見る。イエス様の弟子たちとは、最初に申しましたように、教会の原型ですから、教会に繋がって生きている私たちも、ここに言われている驚くべきことを見るということです。そういう歩みを、私たちは今既に歩み始めているのです。

・「主がここにおられる」

「天が開け、神の天使たちが人の子の上を昇り降りする。」、この言葉は、旧約聖書に出てくるある出来事が背景になっています。創世記 28 章に、ヤコブという人が出てきています。彼は、双子の弟でしたが、狡猾にも兄から全てを奪い取ってしまいました。その中で最も重要であったのは、神様の祝福を受け継ぐ権利だったのです。けれども、その結果、兄の強い怒りを買うことになりました。命の危険を感じたヤコブは、遠い国の親族を頼っていくことになりました。

彼は、逃亡の最初の日、野宿をすることになり、石を枕に眠りにつきました。辺り

は暗闇、それは、彼のこれから進む人生を暗示しているようでした。ところが、そこで彼は思いもしないものを見たのです。夢の中で、天まで続いている梯子が現れて、それを天使たちが昇り降りしている姿を見たのです。そして、神様の声を聞いたのです。「わたしはあなたと共にいる。わたしはあなたに約束したことを果たすまで、決して見捨てない。(創世記 28 章 15 節)」と。眠りから覚めたヤコブは言うのです。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」と。祝福を受けたはずなのに、問題に問題が覆い被さっているような状態。一人ぼっちでの逃亡。先行きは真っ暗。そうヤコブ自身は思っていました。しかし、この夜、彼は本当に知らされたのです。この真っ暗な道を一人で歩んでいると思っている自分と、神様が共にいてくださっていたと。そのことを受け止めさせられて、ヤコブはその先の道へと進んで行くことになったのです。

イエス様が「天が開け、神の天使たちが人の子の上を昇り降りする」と言われた時、心にあったのは、このヤコブの姿だったのです。ヤコブが見た天に届く梯子のように、イエス様が私たちの生きる場と天を繋いでくださるのです。そうして、自分が生きているこの場所に、イエス様が共にいてくださるのです。つまり、ナタナエルに、あなたはヤコブが経験したことを経験する、と。そして、弟子たちに、教会に繋がって生きる私たちにも語り掛けておられるのです。「あなたがたも、ヤコブが経験したことを経験する」、つまり、「本当にこの先歩みことが出来るだろうか、真っ暗な道を一人ぼっちで歩んでいるのではないか、そう思っているあなたの傍らに私がいる、どんな状況になっても決して見捨てることはない、そのことをあなたは知る時が必ず来る」ということなのです。そして、「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった」、そう受け止めさせられる時が必ず来るということなのです。そして、それこそが、「偉大なこと」なのです。そして、これは、一回見たらそれでよしではないと思います。ずっと見続けていく、それがイエス様に従う者、イエス様の後をついていく者の歩みなのです。ナタナエル、弟子たち、そして、教会に生きる一人一人、そして私たち一人一人です。この恵みに、事実生きていくのです。

・恵みを受けて生きる

私は、牧師として歩み中で、いつも心にある言葉があります。須崎教会に赴任する準備のために、最初に高知に來させていただいた時のことです。その時に、四国教区で長く歩まれたある牧師とお話する機会がありました。その先生がこう言うことを言われました。「あなたが須崎教会に何が出来るかではありません。須崎教会で働きを担うことを通して、神様が御業を見せてくださいます。それを見に來てください。」と。

そして、約 30 年、この言葉の通りだったと思います。「偉大なもの」を見せていただきながら、歩ませていただきました。「ここに主がおられるのに、私は知らなかった」、そのヤコブの言葉を自分の経験とさせていただきました。2 か月の間に愛する家族を次々と神様の御許にお送りし深い失意の中にいた方と共に捧げた葬儀の場に、病気によって人生の終わりが近づいている教会員の方を尋ねた病床の場に、須崎教会の会堂建築が行き詰まり、道が見えないと思ったその場に、そして、子どもが入院しこれからどうなるのかと思っていたその場に、「主はおられるのに、私は知らなかった」、たとえ私が見失っているとしても、その場にも、神様は共におられたのです。そのことを一つ一つ知らされてきました。そうして、ここまで牧師として歩まされてきました。

今は一つの例として、私のことをお話ししましたが、これは、勿論私だけのことではありません。教会に繋がって生きる一人一人が、そうして生かされてきたことを思います。「もっと偉大なものを見る」、「主がここにおられるのに、わたしは知らなかった」、神様が共にいてくださる恵みを深く味わわせていただきながら、私たちはここまで歩んできました。ですから、これが先もそうです。そうして、支えられ、導かれて歩んでいくのです

今、私たちは、本当に先の見えない道を歩んでいます。ヤコブが経験したように、暗闇の中にぼつんと取り残されているようです。しかし、その場所で、私たちは知らされていくのです。「主がここにおられるのに、わたしは知らなかった」、私たちの先の見えない現実の只中に、主が共にいてくださることを深く知らされていくのです。そのことを知ることは、私たちが考える良いことが起こる以上に、真の意味で恵み深いことなのです。そのイエス様の導きの中を、私たちは歩んでいくのです。